



日本キリスト教団
三軒茶屋教会

三軒茶屋 教会通り

第13号 2001年12月発行

〒154-0024
東京都世田谷区三軒茶屋1-31-5
TEL/FAX:(03)3418-4933
編集/発行:広報部

今こそ平和の主に仕える



牧師陣内厚生

まもなく今世紀最初のクリスマスを迎えます。ことしのクリスマスに私たちは何を聴かねばならないのでしょうか。希望の見えない時代であるとかわかっていながら、あの米国のテロ事件は、私たちを震撼させ絶望の淵に追いやるものとなりました。なぜあのようなテロが誘発されたのかという検証もそちのけで、米英軍による当然のごとき報復攻撃は世界中に不安を与え、再び泥沼化の様相を呈してきました。民族と宗教のからんだ対立の構図は、イデオロギ―の対立以上にしぶとく解決不能なカオス(混沌)を招いてしまっているではありませんか。

私たちがこのクリスマスに聴くべきことは、もう一度、イエス・キリストが何のためにこの世においてになつたかというメッセージであります。そのキリストは暗闇の世に受肉されました。この世には、自らの力を思うがままに振るおうとする権力者があり、多くの政治権力が自己を絶対化する誘惑に陥っています。しかし過去の歴史が証明しているよう

に、自己絶対化する権力は絶対的に腐敗・破滅の道を進みます。そしてこのことは、「主はその腕で力を振るい、思いがる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます」(ルカ一・五一―五三)というマリアの賛歌に予告されたとおりです。キリストは、神と等しい者であることを固執せず、僕(しもべ)の身分になり、十字架の死に至るまで従順であり、世のために僕としての道を歩みぬかれました(フィリピ二・六―八)。それは、実に「僕としての主」であられました。

それゆえに、クリスマスを迎える私たちは、この主にならつて、世界のあらゆる力を拒否し、愛と和解と奉仕に徹することを自らの課題として受けとめていかなければなりません。教会もまた、世の僕としての証しをめざし、十字架の福音をこそ実践していかなければなりません。つまり、地の塩・世の光としての存在

を改めて自覚するとき、私たちの「旗色を鮮明に」することが出来るのであります。

さて、クリスマスがもたらす最大のメッセージは、なんと言つても「平和」ということです。「地には平和、御心に適う人にあれ」と天使たちは告げました。私たちが真剣に平和を望むならば、聖書のみ言葉をもう一度吟味してみることが必要でしょう。それは、現今の情勢に見られるような、憎悪と敵愾心による呪縛をどう解消するかという問題です。主曰く、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」(マタイ五・四四)と。パウロもまた答えます。「あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい」(ローマ二・一四)、「自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい」(同二・一九)と。このメッセージは、私たちが信仰における服従ということを軸に据えることで、現実のものとなるでしょう。謙遜と柔和をもって証しされた平和の主に、二十一世紀の希望を確信したいものです。